



講義

白羊宮

宮

宮

本
文
D

60

65

70

75

白羊宮

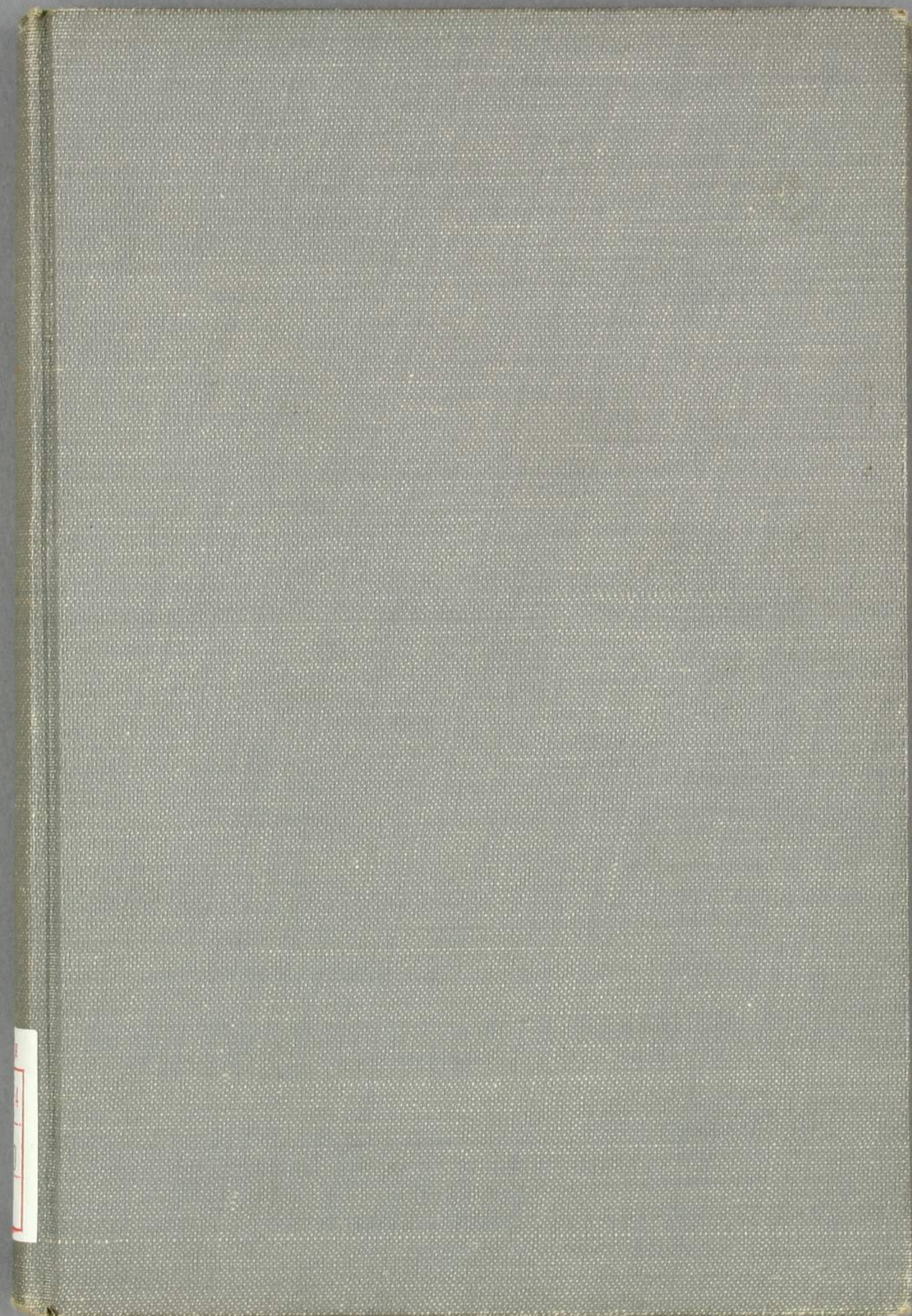
撰集

藤田

本間文庫

文庫 14

D 200








薄田淳介作

白羊膏

東都

金尾文淵堂藏版

文庫14
D200

この書を後藤寅之助氏にささぐ


目次



わがゆく海 二
ああ大和にしあらましかば 六
魂の常井 二二
ひとづま 二七
冬の日 三一

目次

零餘子 二七

鶉の歌 三四

望郷の歌 四三

金星草の歌 四八

夕聲 五五

師走のひと日 五九

妖魔『自我』 六五

日ざかり 七五

笛の音 八一

鳩の浄め 九三



をとめごころ 九七

忘れぬまみ 一〇〇

離別 一〇三

香のささやき 一〇六

時のつぐのひ 一〇九

美さ名 一一〇

牧のおもひで 一一三

くちづけ 一二四

大葉黄堇 一二六

無花果 一二八

心げさう……………一三〇

わかれ……………一三三

幻なりき……………一三三

月見草の歌へる……………一三四

野菊の歌へる……………一三三

夢ざめしをり……………一三七

海のおもひで……………一四四

はこやなぎ……………一四七

難波うばら……………一五〇

白すみれ……………一五三

都大路……………一五六

希望……………一五九

聖り心……………一六〇

新生……………一六一

樹の間のまぼろし……………一六二

片かづら……………一六五

忘れがたみ……………一六八

枯薔薇……………一七一

戀のものいみ……………一七四

小木曾女の歌……………一七七

夏の朝……………一八一

さざめ雪……………一八六

烟……………一九一

寂寥……………一九三

隠り沼……………一九五

江林……………二〇一

睡蓮の歌……………二〇五

海のほとりにて……………二〇九

知らぬかなた……………二二三

夕とどろき……………二二六

涙の門をゆきすぎて……………二二九

朝顔姫の嘆き……………二三三

筑波紫……………二三〇

樂のすずろぎ……………二三三

藝の許され……………二三八

鈴蘭の歌……………二四二

三の百合……………二六三

雛罌粟……………二七〇

小雀と桂女……………二七二

挿書

わがゆく海……………満谷國四郎筆

鈴 蘭……………鹿子木孟郎筆

白羊宮目次畢





白羊宮目次畢

目次

挿書

わがゆく海

鈴蘭

滿谷國四郎筆

鹿子木孟郎筆

白
羊
宮

わがゆく海

わがゆくかたは、月明りさし入るなべに、

さはら木は腕たるげに伏し沈み、

赤目柏はしのび音に葉ぞ泣きそほち、

石楠花は息づく深山、

「寂靜」と、
名 聖ヲセト

「沈黙」のあぐむ森ならじ。

わがゆくかたは、野胡桃の實は笑みこほれ、

黄金なす柑子は枝にたわわなる

新墾小野のあらき畑、草くだものの

醸酒は小甕にかをる、——「休息」と、

系
「うまし宴會」の場ならじ。

わがゆくかたは、末枯の葦の葉ごしに、
 爛眼の入日の日ざしひたひたと、
 水鏡の面にまたたくに見ぞ酔ひしれて、
 姥鷺はさしぐむ水沼、——「歎かひ」と、
 『追懷』のすむ郷ならじ。

わがゆくかたは、八百合の潮ざるどよむ
 遠つ海や、——あゝ、朝發き、水脈曳の

神こそ立てれ、荒御魂、勇魚とる子が
 日黒みの廣き肩して、いざ『慈悲』と、

『努力』の帆をと呼びたまふ。

三十九年十一月 明日生「千歳」お載

ああ大和にしあらましかば

ああ大和にしあらましかば、

いま神無月、

うは葉散り透く神無備の森の小路を、

あかつき露に髪ぬれて、往きこそかよへ、

斑鳩へ平群のおほ野、高草の

黄金の海とゆらゆる日、

塵居の窓のうは白み、日ざしの淡に、

いにし代の珍の御經の黄金文字、

百濟緒琴に、齋ひ瓮に彩畫の壁に

見ぞ恍くる柱がくれのたたずまひ、

常花かざす藝の宮、齋殿深に、

焚きくゆる香ぞ、さながらの八鹽折

美酒の甕のまよはしに、

さこそは酔はめ。

新墾路の切畑に、

赤ら橘葉がくれに、ほのめく日なか、

そことも知らぬ静歌の美し音色に、

目移しのふとこそ見まし、黄鶺鴒の

あり樹の枝に、矮人の樂人めきし

戯ればみを、尾羽身がろさのともすれば、

葉の漂ひとひるがへり、

籬に、木の間、——これやまた、野の法子兒の

化のものか、夕寺深に聲ぶりの、

讀經や、——今か、静ころ

そぞろありきの在り人の

魂にしも泌み入らめ。

日は木がくれて、諸とびら

ゆるにきしめく夢殿の夕庭寒に、

そそ走りゆく乾反葉の

白膠木榎棟名こそあれ、葉廣菩提樹、

道ゆきのさざめき、諳に聞きほくる

石廻廊のたたずまひ、振りさけ見れば、

高塔や、九輪の錆に入日かけ、

花に照り添ふ夕ながめ、

さながら、緇衣の裾ながに地に曳きはへし、

そのかみの學生めきし浮歩み、――

ああ大和にしあらしかば、

今日神無月、日のゆふべ、

聖ごころの暫しをも、

知らましを、身に。

魂の常井

ああ野は上じらむ曙の
ゑわらひ浮歩む童女さび、
瑞木の木がくれに、花小草、
莖葉の下じめり香を高み、

朝踏む陰路の行ずりに、
若ゆる常夏の邦あらば、
往かまし、わが心葉がらみに、
くれなる、燃ゆる火の花と咲かめ。

ああ世にしるがねの高御座、
美酒の香ぞにほふ御座の間に、
立ち舞ふ八少女の入綾や、

樂所のをんな樂、箏篳の音の
どよみよ、大海の浪とゆる
夜ながを、宴會うつ宮あらば、
ゆかまし、わが心酔さまに、
はえある歌ぬしの名をか得め。

ああ、日は身隠れし宵やみの
木立の息ごもり、氣をぬるみ、

林精は水鏡江に羽ぞ浸す

静寂を、月しるの影青は、

ほのめく氣深さや、空室に

燈明の火ぞしめる寺あらば、

ゆかまし、わが心夜ごもりに、

天ゆく羽車や聞きつべき。

ああ、然は野に、宮に、夜ごもりに、

あくがれまどひにし日はあれど、
 果しは野ごころの伸羽して、
 歸るや、なつかしき君が手に。
 たゆげの片ゑまひ、優まみの
 うるみよ、うら若き靈魂の
 旅路に熱れては、掬みつべき
 うべこそ、眞清水の常井なれ。

ひとつま

あえかなる笑や、濃青の天つそら、
 君が眼ざしの日ぬるみ、
 寂しき胸の末枯野につと明らめば、
 ありし世の日ぞ散りしきし落葉樹は、

また若やぎの新青葉枝に芽ぐみて、

歡喜のはた悲愁のかけひなた、

戯るる木間のした路に、美し涙の

雨滴り、けはひ静かにしたたりつ、

蹠やはき『妖惑』の風おとなへば、

ここかしこ、『追懷』の花淡じろく、

ほのめきゆらぎ、『囁き』の色は唐棣に、

『接吻』のうまし香は霧の如、

くゆり靡きて、夢幻の春あたたかに、

酔ごこちあくがれまどふ束の間を、

あなうら悲し、優まみの日ざしは頓に、

日曇り、『現し心』の風あれて、

花はしをれぬ、蘂えし青葉は落ちぬ、

立枯の木しげき路よ、ありし世の

事榮の日は、はららかにそそ走りゆき、

鷺脚の『嘆き』ぞ、ひとり青びれし

溜息なげ息低ひくにまよふのみ。——夢ゆめなりけらし、

ああ人妻ひとづま——

實かにあえかなる優目見やさまのもの果はかなさは、

日直ひなはりの和なぎむと見みれば、やがてまた、

搔かきくらしゆく冬ふゆの日の空そら合あひなりき。

冬の日

新嘗にいなみの祭まつり日びなりき、

午ひるさがり、曝さられし河原かはらに、

老御達おいび「冬ふゆ」こそたてれ、

身みぞたゆげに。

數へ日のこころ細さや、
涙眼なる日のたたずまひ、
物の影淡げに揺れて、
うるみ色に。

雲の襞ほのかに鈍み、
空ひくに滑るゆるかさ、

ありし世のおもひでぐさの
榮、また、空華。

みだれ伏す根じろ高萱、
老しらむ末葉のそそけ、
氣を寒み、失聲かすけく
音こそいたため。

今し、日は思ひ消ゆらし、
面隠し、うは曇りして、
夕時雨しのびに泣くや、
歔歔よよと。

かかる日よ、在巢の鳥も、
うらびれし目路の眺めに、
さへづりの徒音を絶えて、

俯居すらめ。

束の間や、やがて日直り、
冬の日ほほ笑みそめつ。
青じろき頬ぞ、鼻じろむ
面ほでり。

樹に、莖に、伏葉に、石に、

泣き濡れしうるほひ映えて

嘆かひの似るものもなき

うつくしさや。

日の心地、いまの憂身に、

そのかみの美き目をしのぶ

さびしさに、笑みし子ならで、

誰か解かめ。

▽ 零餘子

片びなた、醜家のかくれ、

蕪だかの老木にそひて、

頂がけり、蔓の手たゆき

零餘子かづら。

八少女の野の使ひ女に、
 身ぞひとり、ささやけ者や、
 葉がくれに、ああ聊かの
 實こそむすべ。

熟色の黄金覆盆子は、
 そら聖あかつら鶴

ひと日來て、啄ばみ去りぬ、
 酔のすさび。

核ぐみし茱萸は、端山の
 まめをとこ、栗鼠か拾ひて、
 小甕酒醸みもこそすれ、
 洞窟ふかに。

似にず、ひとり莖くき葉はのしたに、

(隠こもり戀こひ人ひとこそ知しらね)

實みはむすび、實みはまた熟つえて、

蔓つるもたわに。

つむじ風かぜ、した葉はの煽あふり、

あたふたと零ぬ餘かご子ごはこぼる。

ああ不さ祥がな、—— 薊いら高たか珠じゆ數ずの

珠たまのみだれ。

實みは、さあれ底し土はににひそみ、

日ひにめざめ、濕しめりに吹ふ吐くび、

いつかまた芽め生はえを伸のして、

二ふた代よゆかめ。

身みぞ小せ野のの矮ちひさ人ごながら、

あけほのの映、またありし
夕ながめ、見こそ酔ひしか、
數多がへり。

身の程のいささけ業に、
許されの性は足ひぬ。
ああ熟實、——わが世は落ちて
またかへらじ。

秋収め、野田のせはしさ、
敝履のはためきや、——いま、
せつなさの唸囁ゆるに、
葉こそ喘げ。

鶉の歌

うべこそ來しか、小林の

法子兒鶉

そのかみ、(邦は風流男の代にかもあらめ。
豊明節會の忌ごろも、童男のひとり、

日蔭かづらや曳きかへる木のした路に、

葉染の姫に見ぞ婚ひて、生れにし汝、

黄櫨のうは葉はくれなるに、

また、榛實の虚の實は、根に落ち鳴りて、

常少女なる母宮の代としもなれば、

すずろありきや許されて、

さこそは獨り野木の枝に、

占問ひ顔にたたずみて、

初祖の人や待ちつらめ。

ひととせなりき、

春日の宮の使ひ姫秋ふた毛して、

竹柏の木の間をゆきかへる小春日和を、

都ほとりの秋篠や、

『香の清水』は水錆びてし古き御寺の

頽廢堂の奥ぶかに、

技藝天女の御像の天つ大御身、

玉としにほふおもざしに、

美し御國の常世邊ぞ

あくがれ入りし歸るさを、

ふとこそ荒れし夕庭の朽木の枝に、

汝が靜歌を聞きすまし、

心あがりのわが絃に、

然は緒合せにゆらぐ音の歌ぬしこそは、

うべ睦魂の友としも、

おもひそめしか。

またひと歳は神無月、

日ぞ忍び音に時雨れつる深草小野の

柿の上枝に熟みのこる美し木酩、

入日に濡れて面はゆに紅らむゆふべ、

すずる歩きの行くすがら、

竹の葉山の雨滴りはらめく路に、

汝をひとり黄鶺鴒の

黙の俯居をかいまみて、

*ありし掛想のまれ人の

化か雨じめる野にくゆる物のかをりに、

そのかみの夜や思ひいでて、

涙眼に鳥は嘆くやと、

目ぞ留りにし。

ああ汝こそ、小林の

法子兒鷄、——人の世の往くさ來るさに、

ともすれば、まためぐり會ふ魂あへる子や、——

實にいささめの縁ながら、空華にはあらじ。

わが魂の小野にして、

『努力』の濕ひ、『思慧』の影おほし齋きて、

さて咲きぬべき珍の花、

そのうら若き苔みこそ、

さは龕の戸と噤みつれ、

まだき滴る言の葉の美しにほひは、

生命の火をも齋はふまで、

香にほのめきぬ。

*秋篠寺に香水堂あり常曉阿闍梨闍伽井の舊蹟なり

*竹の葉山の下路は深草少將が通ひ路の舊蹟と傳へらる

望郷の歌

わが故郷は、日の光蟬の小河にうはぬるみ、
在木の枝に色鳥の咏め聲する日ながさを、
物詣する都女の歩みものうき彼岸會や、
桂をとめは河しにもに梁誇りする鮎汲みて、

小網の雫に清酒の香をか嗅ぐらむ春日なか、
櫂の音ゆるに漕ぎかへる山櫻會の若人が、
瑞木のかげの戀語り、壬生狂言の歌舞伎子が
技の手振の戯ばみに、笑み廣ごりて興じ合ふ
かなたへ、君といざかへらまし。

わが故郷は、楠樹の若葉仄かに香ににほひ、
葉びる柏は手だゆげに、風に揺ゆる初夏を、

葉洩りの日かげ散斑なる糺の杜の下路に、
葵かづらの冠して、近衛使の神まつり、
塗の轅の牛車、ゆるかにすべる御生の日、
また水無月の祇園會や、日ぞ照り白む山鉾の
車きしめく廣小路祭物見の人ごみに、
比枝の法師も、花賣も、打ち交りつゝ、頼れゆく
かなたへ、君といざかへらまし。

わが故郷は、赤楊の黄葉ひるがへる田中路、
稻搗をとめが静歌に黄なる牛はかへりゆき、
日は今終の目移しを九輪の塔に見はるけて、
静かに瞑る夕まぐれ、稍散り透きし落葉樹は、
さながら老いし葬式女の、懶げに被衣引延へて、
物嘆かしきたたずまひ、樹間に仄めく夕月の
夢見ごこちの流盼や、鐘の響の青びれに、
札所めぐりの旅人は、すゞる家族や忍ぶらむ

かなたへ君といざかへらまし。

わが故郷は、朝凍の眞葛が原に楓の葉

そそ走りゆく霜月や、専修念佛の行者らが

都入りする御講風ぎ、日は午さがり、夕越の

路にまよひし旅心地、物わびしらの涙眼して、

下京あたり時雨する、うら寂しげの日短かを、

道の者なる若人は、ものの香朽ちし經藏に、

塵居の御影、古渡りの御經の文字や愛しれて、

夕くれなるの明らみに、黄金の岸も慕ふらむ

かなたへ、君といざかへらまし。

(左の世に一月)

金星草の歌

一

そのかみ、山の一日に、草木はなべて、

ああ金星草、

色ゆるされの事榮に笑みさかゆるを、

ああひとつば、

ひとり空手に、山姫の宣をこそ待て、

ああひとつば。

二

春は馬酔木に、蝦夷堇かざしぬ、花を。

ああひとつば、

装ひ似ざるうれたさに、宮にまゐりて、

ああひとつば、

願へど、姫は事なしび、素知らぬけはひ、

ああひとつば。

三

夏は山百合、難波薔薇香にほのめきぬ、

ああひとつば、

匂ひ香なきにうらびれて、一日は洞に、

ああひとつば、

嘆けど、姫は空耳に片笑みてのみ、

ああひとつば。

四

秋は茴香、えび蔓實ぞ色づきつ、

ああひとつば、

素腹の性を恨みわび、夜を泣き濡れて、

ああひとつば、

萎ゆれど、姫は目も空に往き過ぎましぬ、

ああひとつば。

五

やがて葉は散り、實は朽ちぬ。冬木の山に、

ああひとつば、

獨りし居れば、姫は來て『思ひかあたる、

ああひとつば、

世は吾とわが知るにこそ、在りがひはあれ。』

ああひとつば。

六

姫は微笑み、『今日もはた、香をか羨む、

ああひとつば、

色をか、いかに、齋ひ子の斯くや、御賜。』と

ああひとつば、

その日よりこそ、黄金斑の紋葉とはなれ、

ああひとつば。

夕ごゑ

日は暮れぬ、野の面低に、

霧はくゆるたゆげさの、

齋精進、懺悔のひと夜、

思ひしづむ魂ならし。

夕晴の黄金路に、

かへる鳥の遠がくれ、

胸の汚染ひとつ消えて、

今はた、二のうするかに。

葉ずくなの並木なかに、

『静こころ』の浮歩み、

木木の枝しぬに垂れて、
われかのように息づきぬ。

いま雲の夕くれなる、

天照る日の大殿に、

をんな樂かへり聲の

ほのにひびく夢ごこち。

浄まはる魂の深み、
聖ごころととのひて、
美し音のさこそ響む
日のあなたに往かまほし。

師走の一日

—

み冬となりぬ、日暮れぬ、
ひねもす森にあらびし
脚早の野分は、うしろ寒に、
そそけの髪もみだれて、

北山あたりいそぎぬ。

もとあら木立の落葉林、

木の息ごもりたゆげに、

残りの葉こそは風にあへげ。

二

澄みつる空や、さながら

ありにし戀も忘れて、

菩提樹がくれの法の苑に、

『無漏慧』にあそぶ聖の、

とわたる鳥のありなし、

いささの染をもえは許さぬ

齋戒か、——嚴の清まりは、

見るだに堪へせじ、現しごころ。

三

あな大目枝の額に、

玉冠する夕日の

光や、天なる美し眼ざし、

東へ、ゆるに峰越の

淡雲すべる静けさ、

これやは終なる魂のひと日、

すずるに心ゆらぎて、

ありしを忍ぶる美き名ならし。

四

束の間なりき、夕ばえ、

今はた灰にうすれぬ。

さて日は葬式の鈍に暮れて、

真闇の墓に入るらめ。

この静かなる臨終に、

吾や看護婦の心しりに、

日の物深さしのびて、
秘密のころも辿らまほし。

*洛東下岡崎の里より

大比叡の方を眺めてよめる

妖魔「自我」

一

妖こそ見しか、立枯の木繁き木原、
色鳥はさしぐむ路の奥ぶかに、
ひともと青木木叢なる廣葉のかくれ、
黄金なす鈴生の實をなつかしみ、

熟みつはりたるひと房を摘みにし日なり、

矮人の黒染すがたつと見えて、

『あな許されぬ慧の實を、』と私語低に、

面隠し、目ぶかに被衣うちまとひ、

持杖の音ほとほと、木のした路を、

見え隠れ、鷺脚にこそ辿りしか。

二

妖はそ見しか、姫百合は木暗に俯居、

石楠花は日向に夢む花苑に、

あえかの人と相曳の日のしづけさを、

囁きは細蜂の羽とひるがへり、

うまし言葉は清酒の露としたみて、

酔心地、愛でのまどひを、——あな詫し、

生目とまりし葶垂の裾うちへて、

木がくれに奥寄る人の後姿に、

頂へながくる手ては解とけたるみ、ふくる心こころの
氣けをさむみ、身みは物もの怖おそに竦すくまりき。

三

妖まろこそ見みしか、午ひるさがり日ひぞ照てりあかり、
美うとし香かはほのかに薰くゆる新あたら館や、
一いちの樂がく所ところにかきならす眞ま玉たま唐から琴こと、
立たち樂がくの色いろ音ねは浪なみのたかまりに、

心こころあがりの面おもてほでり、とりゆの半なかば、

風かぜ流なが男をとこや、紅あか顔かほ嬢ぢやう子この間まひの座ざに、

異ことよそほひの長ながすがた童わらわ男をとこのひとり、

弱よわ肩かたの藤ふじ衣ぎのやつれに見み惱なやひて、

押おし手ては梁はりのくづれ鮎あゆさみだれ落おちて、

緒いと合あせの調しらべの糸いとぞなか絶たえし。

四

妖こそ見しか、御燈の火はねむたげに、

華籠の花吐息かすけき古寺に、

夕座まゐりの在り人は罷りし夜はを、

身ぞひとり齋居精進の籠り居に、

思ひ恍けてし常世邊の、美し黄金の

巖の苑、天つ少女の相舞に、

見しは、頭白のねび御達、あな時のまに、

なよびかの姫は隠れて、唯ひとり

墳墓の如立ち残るものわびしさに、
胸騒ぎ、つとまほろしは覺めはてき。

五

妖こそ見しか、水無月の祭のひと日、

往き軋む飾車の山鉾に、

日ぞ照りしらむ日盛りの都大路を、

人なだれ、祭物見の大衆に、

また見ぬ鈍の衣かづき他こそ知らね、
不毛地の野にも往くかのうらびれに、
打附ごころ、小走りに追ふとはすれど、
物の怪は絶えずかなたに前ゆきて、
えこそ及ばね足惱みぬ、ああ息詰むと、
道のべに、身ぞしだらなに倒れにし。

六

こよひ熱るる病臥の惱みのもなか、
世はとみに鴉羽いろの焔して、
蕩けたゆたふ火の海に、吾や落葉の、
左視右顧、ゆくへも知らぬ途すがら、
ふと遠方に目馴てし人がたち見て、
直みちに追ひすがりつゝ失聲して、
『君よ』と呼べば、立ちどまり、振向き様に、
『見惱ひの時こそ來れ。』と脱ぎすべす

被衣かきのひまに見入みるれば、あな「我われ」なりき、

驚駭おどろきに胸むねはふたぎぬ、危篤あつしれぬ。

(其の意は、
三日月の夜、
白羊宮の
鐘の音に
驚かされぬ)

日ざかり

季ときは夏なつなか、

日ひぞ眞晝まひる、

日ひざしは麥むぎの

穂ほにしらみ、

日ざかり

野のなかの路みちに

またたきて

濁酒しろうまの如ごと、

湧わきたちぬ。

牧まきの小野をのには、

並木なみこ立たち、

腕かひでだるげに

葉はを垂たれつ。

青あへふくれなる

水み錆沼さびぬは、

めまぐるしさに、

息いきだえぬ。

雲くものひとひら、

たよたよと

唵喞ひゆきて、

ありなしに、

やがては消えつ。

濃青なる

空や、虚なる

墓ならし。

水の面の水澁

氣をぬるみ、

蝶鰓は涅に

くぐり入り、

爐土の香に

息むせて、

蛇はひそみぬ、

葉がくれに。

なべての上に

高照す

嚴の嘖や、

あな寂し、

悔なき魂の

けだかさは、

げに水無月の

日ならまし。

笛の音

生命の路のもる側に聳やぎ立てる

『かなしび』の女木『よろこび』の男木、

今宵さしぐむ月代のまみの濕みに、

すずるに木靈うらびれて、

天の幸夜にあくがるる沈黙の深みを、
笛の嘆きの音をいたみ、
上枝そよるに囁やきて散りこそまがへ、
二木の落葉ほろほろに。

『日影にしめらへる』

『かなしび』の

一片は黄朽葉の

色に染み。』

『日向にひるがへる』

『よろこび』の

一片は緑葉の

香にほふ。』

『ああ、わが故郷は』

聖^{ひじ}り世^よの

沈^{しじ}黙^まぞ、齋^い居^むする

嚴^{いづ}の苑^{その}』

『また、わが本^{おほ}宮^{みや}は、

篁^く篔^この音^ねの

緒^そ合^あせ、うちどよむ

美^{うま}し國^{くに}。』

『そこしも、黄^こ金^{かね}なす

『慧^あ』の實^みはた

木^こぐらき無^む憂^う華^け樹^{じゆ}の

葉^はのにほひ。』

『かしこよ、狹^さ丹^にづらふ

『愛^{あひ}』の花^{はな}、

『努力』の常烽火、

日の光り。』

『そこしも齋き女の

小忌ごろも、

蠟の火、黄金文字、

偈のけはひ。』

『かしこよ、八少女の

をんな樂、

盃誓、さざめ言、

白酒の香。』

『かなたへ、——忌精進、

夜ごもりに、

今はた歸るべき

羽』といへば、

また言ふ、『かかる夜を、

宴會うつ

かなたへ、——いざ、朱の

楮舟を。』

『苑には、領す神

名こそあれ、

畏こし、あな天の

『あくがれ』女。』

『宜こそ、いまそがる

國つ神、

尊とし、名は天の

『あくがれ』男。』

色音は絶えつ、——酔ひざまの心あがり、

さざめき散りし翻れ葉は、

糸絡みせし舞の羽のつと舞ひさして、

噤みぬ、下に落ち敷きぬ。

生命の路に、雌鳥羽にはた雄鳥羽に、

唇觸れあひて相寝ぬる

伏葉の亂れ、魂合へる美し睦びに、

月は夜すがら見ぞ惚けぬ。

*秋の末つ方月の一夜洛東華頂山

境内に笛の音をささきて咏める

鳩の浄め

夏なかの榮えは過ぎぬ、
くたら野の隠れの古沼、
『静寂』は翼を伸して
はぐくみぬ、水のおもてを。

鳩や、實に浄めの童女、
尼うへの一座なるらし。
なづさひの羽きよらかに、
水み泥どろなす水み澁しぼに浮うきつ。
水み漬づく葉はの眞ま菰こものみだれ、
伏ふし葦あしの臂ひでのひかがみ、

末枯や、——さてしも齋場、

おもむるに鳩は滑りぬ。

漁人の沓のおとにも、

鼻じろみ、面隠す兒の

振りかへり、かつ涙ぐみ、

水がくれにつとこそ沈め。

河骨の夏を夢みて、

ほくそ笑む水底の宮、

潜ぎ姫、『歸依』の掬むなる

常若の生命湛ひぬ。

見ず、暫時、——今はた浮きつ、

浄まはる聖ごころの

かひがひし、あな鳩の鳥、

日ひねもすに齋いっきゆくなり。

をとめごころ

一

黄金こが覆い盆ち子は葉はがくれに、

眼まなこうるみて泣なきぬれぬ。

青水あそみ無な月づきの朝野あさのにも、

嘆なげきはありや、わが如ごとく。

二

幸も希望も、やすらひも、
 海のあなたに往き消えつ。
 この世はあまりか廣くて、
 をとめ心はありわびぬ。

三

朝踐む風のささやきに、
 覆盆子のまみは耀きぬ。
 神はをとめを路しばの
 片葉とだにも見給はじ。

忘れぬまみ

一

夏野の媛の手にとらす
 しろがね籠ももくさの
 香には染むとも追懐は
 人のまみには似ざらまし。

二

伏目にたたすあえかさに、
 ひと日は、白き難波薔薇、
 夕日がくれに息づきし
 津の國の野を思ひいで。

三

ひと日は、うるむ月の夜に、
水漬く磯根の葦の葉を、
卯波たゆたにくちづけし
深日の浦をおもひいでぬ。

離別

—

別れは、小野の白楊、
夕日がくれに落つる葉の
長息よ、繁にうらびれて、
さあれ、静かに離れゆきぬ。

二

かたみの路の足惱みに、
思ひしをれて弛む日は、
美しくしかりしそのかみの
事榮にしもなぐさまめ。

三

愛でのさかりに、何知らず、
この日も、やがてありし世の
往きてかへらぬ追懐と、
消ゆらめとこそ思ひしか。

香のささやき

一

この夕ぐれの静けさに、
 魂はしのびに息づきて、
 何とはなしに、おもひでに、
 二つの花の香を嗅ぎぬ。

二

ひとつは、湿める梔子の、
 別れのゆふべ泣き濡れし
 あえかの胸に、今もはた、
 『日』は残らめとささやきつ。

三

ひとつは、薫ゆる野茨の、
今は未枯れぬ、そこにして、
また新しき『日』は芽ぐみ、
花もぞ咲くとつぶやきつ。

時のつぐのひ

時はふたりをさきしかば、
また償ひにかへりきて、
かなしき創に、おもひでの
うまし涙を湧かしめぬ。

美き名

今日しも、卯月宵やみに、
 十六夜薔薇香ににほふ。
 なつかしきもの、胸の戸に、
 黄金の文字の名ぞひとり。

神はをとめを召しまして、
 いづくは知らず往にしかど、
 大御心のふかければ、
 残る名のみは消しませね。

牧のおもひで

夕月ゆづきさしぬ、野のは凍しもみぬ、
日ひのいとなみに倦うみはてて、
苜かりし小こ草くさに倒たふれ伏ふし、
別わかれし人ひとの身みぞおもふ。

さても、眞ま晝ひるを玉たま敷しきの
御み苑そのにたたす君きみなれば、
夜半よにはかかるとら野のに、
すずろ歩あきもし給たまひぬ。

くちづけ

今朝あけぼのの浦にして、
われこそ見つれ、面ほでり、
濃青の瞳子、ひたひたの
み空と海の接吻を。

君や青空、われや海、
ああ酔心地、擁しめに
胸ぞわななく、さこそ、かの
か廣き海も顫ひしか。

大葉黄すみれ

人待つ宵を、日のかたみ、

大葉黄堇花さきぬ、

愛での盛りに、言ひ知らず、

物さびしさの身にぞ泌む。

花とをみな、の持てなやむ

悲びな來そ、天つ日の

ながながし、齡に唯ひと日、

今日に酔ふなる身のふたり。

無花果

葉こそこぼるれ夏なかの
 青水無月のかげに見し
 その日の夢はまづ覺めて、
 今日^けはた汝^{いまし}——ああ無花果^{いちじく}。

昨日^{きの}ぞ夕^ゆにあかつきに
 露^{つゆ}けかりつる身のふたり、
 明日^{あす}を天^{あめ}なる大御手^{おほみ}に
 委^{ゆた}ぬるもはた、——ああ無花果^{いちじく}。

心げさう

霜月ひと日、朝戸出に、小野の木守は、
荊高膚の阿利襪樹の根に散りほひし
實のあり數に驚きて、つと立ちかへり、
目無し籠を後ろ手にふた行くごとく、

ただ目に人を見し時は、なよび姿の
耀ひわたる清らさに、戀は退りて、
ふくる心の奥ぶかに隠るとせしが、
落ちゐて、やがて花やかに穂に現はれぬ。

わかれ

別れぬ、二人、魂合ひし身は、常世にも
 離れじとこそ悶えしか、そも仇なりき。
 落葉もかくぞ相舞に散りはゆけども、
 分ちぬ、風は追わけに。さて見ず知らず。

幻なりき

幻なりき、事映の消えゆくにこそ、
 御賜のふゆの、かつがつに目耀ひ初むれ。
 ああ神無月、木叢なる葉ぞ散り透きて、
 濃青の空の微笑ひ、然はほのめきつ。

月見草の歌へる

夕づく日、黄金羽ぐるま、

海の宮、今かも沈め、

天つ軋み。

野づかさの草の浅みに、

まどろみの夢路は覺めぬ、

目こそひらけ。

夕霧は、身様たゆげに、

目馴樹の木叢にまきて、

うしろ袈裟に。

青羽木菟、又枝低に、

月眠り、言葉すくなの

宿居すがた。

静けさの野によみがへる

青をみな身や幸魂の

月見小草。

見よ、かなた、森の木の間、

うは白み、——ああ月白の

にほひ仄に。

いま、樹々の片枝の青み、

やがて、野のしろがね色や、

被衣兄姫。

ちきたりす花の瞳子は、
日にあきて、日にしも笑みぬ、
紅顔童女。

似ず、わなみ若尼御前の、
夜籠りに、ささらえをとめ
見こそ惱へ。

身ぞ、姫が丈の垂り髪
花鬘、しづくや凝りし
こゝろまどひ。

姫か、また魂のおほ宮、
常世邊や、無上涅槃の
嚴のむしろ。

焚きしむる花の蔓は、
夜の、やがて吾が世黄金の
齋ひ火盤。

くゆり香は、莖葉に蒸して、
聖り世の初夜の精進、
齋場浄め。

静こころ、下にゆらぎて、
魂むすび、思ひぞあがる
酔ひの今や。

野の老狐踏みは折るとも、
えやは朽ちめ、身よ弱草の
聖ごころ。

野菊の歌へる

咲きいでて今日しも七日、
野茨の薊にしまじる
うまれ拙な。

つまどひの京をんな鵲、
黄脚踏む下にも折れて、
莖葉かがむ。

神無月入日の淡さ、
しくしくと光はにじむ、
臂の痛み。

彼處、いま花はひからび、

香は朽ちて、老がれ鳴るや、

河原よもぎ。

ここに、また根は覆へり、

亂り尾の苦參こそ寝れ、

腕だるに。

草絡み、落葉の反に、

熟白英、ぬる火の雫、

實こそつゆれ。

今はとて、占野の歌女

蟋蟀は、絃をゆるめて

入るや、培土。

寂しさは墓のふかみに、

あな聞きぬ『宿世』の脚の

忍びありき。

歸依の根を延げばや下に、

戦慄の今はも阿摩へ

かへる心地。

(あな聞きぬ宿世の脚の)

○ 夢ざめしをり

夢ざめつ、今はた聞きね

眞白げの眠りの退羽、

羽ぶきゆくを。

夢か、——さは、わが世の刈野、

片日向、小春日和の

日かげぬるに。

過ぎ去りし日の事榮は、

刈株の芽生を伸して、

花こそ咲け。

花よ、黄のかをりに蒸して、

遶佛や、童すがりの

一は『歸依』に。

花よ、火の雫に燃えて、

下こがれ、葉がくれ朽ちし

『戀』は、朱に。

あるは、葉の煽りのひまに、
しら笑ひ、——似非方人や、
『幸』の白み。

あるは、眼のまなじり濕み、
うなだるる面ざし、妖の
『才』の青み。

また、蔭に蜘蛛網弛みて、
『過去』や、足高蜘蛛の
冷えし死骸。

葉の緑、ふとこそ萎えて、
しをれゆく、——わが世は鈍の
藤衣の窶れ。

青^{あを}びるる身^みよ、朽^{くち}尼^{あま}の

老^{おい}ほけて、見^み入^いるしばしを、

魂^{たま}も瘠^やせぬ。

鈍^{にぶ}の色^{いろ}、ややに薄^{うす}れて、

初^{はつ}びかり、——ああ曙^{あけぼの}や、

目^めこそさむれ。

明^あけわたる光^{ひかり}の野^のこそ、

『當^{たう}來^{らい}』や、わが新^{あらた}身^みの

巖^{いづ}の眞^ま屋^やに。

初^{はつ}びかり、げに常^{とこ}春^{はる}の

かなた見^みて、躍^{とど}りぬ、胸^{むね}の

聖^{ひじり}ごころ。

（あやめしなり）

海のおもひで

一

夕浪倦みぬ、——さこそ吾。

眞白羽ゆらに飄へりし

鷗は水脈に、——さこそわが

魂よたゆたに漂へれ。

二

嘆きぬ、葦はうら枯の

上葉たゆげに顔なきて。

昨日は、ともに葦かびの

若き日をこそ歌ひしか。

三

あな火ぞ點る、夕づゝの

葦間にひたる影青に。

消ゆとは知れど、さこそ、われ

人のまみをば思ひづれ。

はこやなぎ

かかる夜なりき、白楊

うるみ色なる月かげに、

飽かず別れて立ちかへり、

抱きあひては嘆きしが。

二

その夜は、やがて尼ごろも
魂ぞ着そめし日のはじめ、
齋きし『戀』のゆまはりは、
寂しかりきな、人知れず。

三

天なる嚴の御苑にも、
ありや、紀念の白楊、
ひと夜は、かくや木がくれに、
現身の世も見たまはめ。

難波うばら

一

いま月しろの上じらみ、
ほのかに動く宵の間を、
人待ちなれし眞籬根に、
難波薔薇ぞ香ににほふ。

二

待つにし來ます君ならば、
千夜をもかくてあらましを、
忘れてのみはいつの代も
めぐり會ふ日はなかるべし。

三

ひとの御胸にはなるとも、

「戀」はひとりぞ羽含まめ。

日のはじめより泣き濡れし

宿世は似たり花うばら。

白すみれ

—

忘れがたみよ津の國の

遠里小野の白すみれ、

人待ちなれし木のもとに、

摘みしむかしの香ににほふ。

二

日は水の如^{ごと}往^ゆきしかど、
今はたひとり、そのかみの
心^{こゝろ}知^しりなるささやきに、
物^{もの}思^{おも}はする花^{はな}をぐさ。

三

ふと聞^ききなれししろがねの
聲^{こゑ}ざし柔^{やわ}きしのび音^ねに、
別^{わか}れのゆふべ、さしぐみし
あえかのみみも見^み浮^うべぬ。

都大路

一

臨時リツジのまつり事ことはてて、
 都みやこおほ路ぢも敷かぞへ日ひに、
 うら寂さびゆくか、昨日きの今日け
 さこそは似につれ、わがおもひ。

二

かつては、瑞みづの彌木や榮はに、
 葉守はもりの神かみも夢かみしを、
 木陰こゝ路ぢよ、今は『追懷おもひ』の
 落葉おちのみこそ伏ふし沈しづめ。

三

その葉の亂れ、ひとつびとつ
まるびつ、舞ひとつ、片去りに
やがては失せぬ。——さこそ、わが
忘れずの日も往き消えぬ。

希望

日は水の如事、榮のおち葉を浮けて、
流れぬ。やがて冬は來ぬ、熟睡ぞせまし。
身は河ぞひの白楊、またひこばえて、
常夏かげの花苑に新葉はささめ。

聖り心

矢の根を深み、創手より聖りごころは、
 日に夜に、絶えず濃沸きて流れぬ神に。
 青水無月の小林に、漆樹は、さこそ
 木膚の目より美脂をしぬに滴つれ。

新生

悲しかりきな、さあれ、また下に隠るる
 おほみ心も掬びえて、よみがへる身の、
 今はた、などや堰きあへぬ涙か。——さなり、
 沖つ嶋わの潜き女が、手に阿古屋珠
 擁きて浮きし濡髪ぬれかみの、これや、したたり。

樹の間のまぼろし

一

葉こそほるれ、神無月、
 かかる日なりき、
 黄櫨の木かげに俯居して、
 戀がたりする人も見き。

二

葉こそほるれ、午さがり、
 かかる日なりき、
 かたみに人は擁きあひ、
 接吻にこそ酔ひにしか。

三

樹の間のまぼろし

葉こそこぼるれ、そのかみの

一人のひとり、

ふとありし日のまほろしを、

吾かのさまに見惚けぬる。

片かづら

—

相見そめしは、初夏の

空も夢みる御生の日、

冠にかけしもるかづら、

紀念にこそは分かしか。

二

後の逢瀬はいつはとて、
 泣き濡れぬ日もなかりしを、
 はては召されて天つ女の
 空のあなたに往きましぬ。

三

いかに紀念の葵ぐさ、
 のこる桂は乾からびぬ。
 さこそ心も青枯れて、
 『追懷』のみぞ香にほふ。

忘れがたみ

一

こよひ天あめなぬ花はな苑ぞのの
 美うまし黄金こがねのおばしまに、
 夜よすがら君きみや立たすらめ、
 すずろに胸はらのときめくは。

二

言いへばえにのみ打うち過すぎて、
 さては別わかれし人ひとなれば、
 さしも嘆なげきに浮うくぞとは、
 夢ゆめにもいかで見たみまはめ。

三

忘れがたみの『追懷』は、

密ごころのふところに、

小野の月映うるむ夜を、

空のあなたにあくがれぬ。

枯 薔 薇

—

乾びぬ、薔薇あかねさす

花の若えはおとろへぬ。

今はのきざみ、ため息の

香こそ灰めけくちびるに。

二

愛でのまどひに、何知らず、
面がはりせし人妻の
まみの窠れに消えのこる
日のなまめきを見浮べつ。

三

ふとまた聞きつ、榛樹の
縊葉こぼるる木がくれに、
人しれずこそ會ひし日の
忘れて久のささやきを。

戀のものいみ

一

尼額なる白鳩の

朱なる脛に結ひぬとも、

心は往かじ、君が住む

そらのあなたの御苑へは。

二

こよひ濕める夕月の

人酔はしめの寂みに、

そことしも無きささやきの

慣れし色音に聞きとれつ。

三

君きみます方かたにあくがれて、
齋ゆははる戀こひをいとほしみ、
胸むねなる齋屋ゆゑにしのび來きて、
吐息といきかすらめ、天あまをとめ。

小木曾女の歌

いまはた残のこるおもかけの
夢ゆめとはなしにささやくは、
明日あすをも、かくや夕ゆふづけて、
峰越せとこしの路みちに待またまほし。

二

きのふは、御手よ浅間野の

『水無月』姫の鈴まうし、

木の間にゆらぐ鈴蘭の

美しかをりに染みましき。

三

こよひは、髪のかかりばに、

朝露しろき甲斐が根の

山した小野に咲き濡るる

十六夜薔薇の香を嗅ぎぬ。

四

路ゆきぶりに、遠つ野の

顔佳の花は摘ますとも、

小木曾の山のえぞ葎すみれ

あえかの色いろもわすれざれ。

夏の朝

かた岡おかに、

日は照てりぬ、

男木おとぎの枝えに、

鳥とりうたひ、

いさら水

笑みまけて

面はゆに

野こそ滑れ

朝踏ます

風の裳に

草かた葉

さゆらぎて

しづれ散る

露やげに

玉ゆらの

瓊音すらめ

雲はいま

しろたへの

羽を伸しぬ、

朝發き、

海原に、

帆をあぐる

蜃舟の

心みえや。

郎女の

しろ装ひ、

あな「朝」か、

童げに

かた笑みて、

つと消えつ、

「日」はすでに、

牧に立ちぬ。

さざめ雪

夕凍ゆふしもの

小野おのや、伏目ふしめに

さしぐみし

日はみまかりぬ。

左視ひだりみ右顧みぎかん

あな細雪あなこはゆき、

常樂じやうらくの

宮みやとめあぐみ、

ものうげの

旅たびや、はつはつ。

ここ、かしこ、

榛實の殻

また乾反る

伏葉のみだれ

小木の枝に

鷓竦りて

あな、ここは

悲びの邦

鈍色の

住家ならまし。

ささやきつ、

また吐息しつ、

雪片の

嘆きよ、落ちて

葉に石に

凭ひぬ、倦みぬ、

またたきて、
つとこそ消ぬれ、
いささめの
生命か、——濕うるひ。

烟

燃えつや、黄櫨わうじの乾反葉けんはんばに、また橡つるぼみの
爆實ばくみの殻からに。——今ははた、
鈍色にぶいろ被衣かぶぎ身みぞたゆげに、
荇野かひのに凭たよひ、隠こもり沼ぬまの水み澁しぶに浸ひたり、

伏木に添ひて火移りの昨日を夢み、
冷かの今に涙ぐみ、

もの倦がほにたゆたひつ、迷ひつ、聴て

木の上枝より細高に、い行くか烟、

ありなし雲とたゞよひて、

天のところに溶け入りぬ。

寂寥

宿直やつれの雛星は、

睨たゆげにまたたきつ、

竹柏の老木は、寝おびれの

夢さわがしく息づきぬ。

夜はもなか、

吾ぞひとり、

かすかに物のけはひして、

ささやく心地さびしさの

香にほのめきて身にぞ泌む。

隠り沼

初冬の日はたそがれぬ、

隠り沼や山田の乳媪、

おもひでの吐息かすけき

面やつれ。

葉はずくなの並木なみきの路みちに、
黄あめまだら足あし惱なやむ牛うしは、
夕霧ゆふぎりの鈍鈍にかくれつ、
蹄ひつぎおもに。

荳かり小田なの目路めぢや、さながら
齋いはいひ兒ごの葬式ほふりのゆふべ、

跡あと淨ぎよめ、柱はしら隠かくれに、
居ゐよるこころ。

涙なみだぐむ小こ木ぎの翡翠かほそび、
初はつ立たちし巢すや見み忘わすれし、
ものうげに、つとこそ移うつれ、
あなたさまへ。

夕凝の岸のくづれに、

かさこそと、河原菅菜の

これや、はた老いにし夏の

夢のひびき。

佛生會生日の日なか、

花浮けし胸に、こよひは

野の柳 姫が落髪

葉ぞひたりつ。

寂寞や「昨日」は逝きぬ、

「明日」はまた虚音に似たり。

失心なる「今」になづみて、

水かよどむ。

しだらなの眞菰のなかに、

水漬く火や、今宵も星は、

秉燭の火影に、天の

戸こそまもれ。

水泥なす闇き胸にも、

常ひさの光の映や、

たゆげなる笑青じろに、

沼ぞ皺む。

江ばやし

しろがねの角がむり、

あえかなる月しろや、

眼ざしは、天つ阿摩の

慈悲とこそ滴れ。

水鏡みずかがみの香かくゆる夜よを、

江林えぼやしのたたずまひ、

さびしらや、齋居いしむ精進せうじん、

木木きぎの息いきしのびに。

蝙蝠かひばりはうつほ樹きに、

膜あまくはか味あじ嘗なむる。

妖惑ようわくの羽搏はつか絶たえて、
しめらへる樹間このまや。

葉はのひと片ひとひつぶやき、

ふた片ふたひまたささやぐ。

ありし日の榮はえや、さこそ

鷺脚さぎあしに落おつらし。

あな解脱、さばかりの
嚴の夜の氣深さに、
ともすれば、女が吐息の
なよびこそ、仄見れ。

睡蓮の歌

水うはぬるむ水無月の
夏かげくらしき隠り沼に、
花こそひらけ、觀法の
日を睡蓮のかた笑ひ。

しろがね色の花萼に、

一炷のかをり焚きくゆる

薬は、ひめもす薫習の

沼の氣に染みてたゆたひぬ。

たたなはる葉のひまびまに、

ほのめきゆらぐ未敷蓮の

ひとつびとつは、後の日を

この日につなぐ願ならし。

夕となれば、水がくれの

阿摩なる姫がふところに、

ひと目を、やがて現想の

うまし眠りに隠るひぬ。

沼にひとりなる法子兒の
翡翠ならでくだちゆく
如法闇夜に睡蓮の
聖り世を誰がしのぶべき。

○ 海のほとりにて

鈍なるみ空鈍なる海、
ああ身ぞひとり、
入波ゆたにたゆたひて
ゆふべとなりぬ。

氷雨の海の海神は、

椰子の實熟るる

常夏かげの國戀ひて、

胸さわぐらし。

沖の遠鳴潮の香、

ああ酔ごちち、

いづくは知らず、靈魂の
故郷こひし。

わが世は知らぬかなたへと、

日に、また夜はに、

あくがれまどふ野心の

努力の羽搏。

『時』は頓死れて死にぬとも、

遂の日までは、

常若にしもあらまほし、

わだつみとわれ。

知らぬかなた

—

小野の苧生の葉がくれに、

乾田の穧のしたぶしに、

鶉は夢をはぐみぬ。

さこそは似しか、そのかみの

たもとほりにし日の戀は。

二

紅顏嬢子のましら手に、

るよりし宵は、くちづけの

香をしも愛でき。さあれなほ

魂はしのびに吐息して、

知らぬかなたにあくがれき。

三

今宵かすけき囁きに、

ふと聞き惚れて涙ぐむ

心は知らじ、嘗てだに。

そことしも無きかなたこそ、

また追懐のそのかみに、

夕とどろき

一

新月さしぬ、物の香の
 ほのかに薫る五月野に、
 夢かのわたり、都邊の
 夕とどろきに聞きとれぬ。

二

嘗ては、吾もなよびかの
 あえかの人と相知りて、
 世にうつくしき事榮の
 あまた夜にこそ酔ひにしか。

三

日は往き消えつ。今もはた
かすかに残るおもひでの、
何とは知らず、夕ごゑを
吾かのさまにさしぐみぬ。

涙の門をゆきすぎて

涙の門をゆきすぎて、

わが家居こそそこにあれ、

『笑ひ』の花も、『嘆かひ』の
垂り葉も生ひぬ夕庭は、

椽色の被衣して、

墳墓の如しめやぎぬ。

涙の門をゆきすぎて、

そこに『沈黙』の樹こそあれ、

しろがねの葉のした蔭に、

『思慧』の木の実を採り食みて、

生は榛實の虚の實の

『寂み』をのみ味ひぬ。

涙の門をゆきすぎて、

神こそ坐せれ、古御達、

天つ御宣の老舌に、

ひと日は、知らずつらかりし、

さあれ、風雅に數奇なりし

運命神をこそは忍びしか。

* 朝顔姫の嘆き

黄金樞の音こそすれ、
いま『曙』のいでますと、
天の御蔭の一の門は、
戸をかもあくる。

どよみは胸を拵きて、
日の追懐ぞめざめぬる。
ああ曙や、なつかしき
唐棣のころも。

さしぐむ目の濕ひに、
目耀ふ天の羽ぐるまや、

ああ曙のうはじらむ
唐棣のころも。

美しかりしそのかみの
夢の香ほのに身に泌みて、
手弱腕の卷鬚ぞ、
わななき撓む。

天の御蔭の宮づとめ、
朝顔姫の名に呼ばれ、
七座す星の群にして、
舞ひしやむかし。

おほみ淵酔の良夜に、
日子に婚ひてし日の初め、
嚴のむしろを禁められて、

花とし生ひつ。

花とを咲けど、『くらやみ』の

牢獄の窓に俯居して、

ああ曙や、夜もすがら

君をこそ待て。

君を待つ間をゆるされに、

天の足日をかいまみる

ありなし時や、せつなさの

心もすずる。

はかなき今の身柄には、

ひかりは久に堪へなくに、

ああ曙や、まばゆさに、

目こそ盲ひぬれ。

黄金向日葵、日移りに、

日の轍をこそ趁ふといへ、

わなみ盲目のうなだれて

方もぞ知らぬ。

「悲愁」は若き孕婦にて、

日なみに五百の眼をはらみ、

ああ曙や、目伸して

君を待たまし。

* 朝顔姫は七夕七姫のうちの
ひとりなり

* 筑波紫

夜は明けぬ二の新代の朝ほらけ、
 國の兄姫の長すがた富士こそ問へれ、
 しるがねの被衣も搖に、「やよ筑波、
 八十伴の緒は玉ぶちの冕冠も高に、

天の宮御垣は守るに、いかなれば、
 異よそほひの東人と、汝やはひとり、
 玉敷の御蔭の庭も見ず久に、
 下なる國の暗谷につくばひ居るや。』

筑波根の東聲して、「天の宮、
 御使ひ姫は汝こそあれ、われは國造、
 高翔くる日の羽車をともなひて、

朝なゆふなに七度の國見の反身、

「汝が希望、あくがれ、吟詠、高わらひ、

努力、若やぎ、また愛の華座はここに。」と、

むらさきの常若すがた花やかに、

ほにこそ揚ぐれ、人の世の、あはれ烽火を。」

* 詩集『筑波紫』に序す

* 樂のすずろぎ

衣かづき腕たゆげに、

夕月は門にこそあよれ。

静寂は清み酒の如、

野も山もねむげに酔ひつ。

ひともとの河原赤楊
うなだるる下枝の梢
四の緒は風に歌へり、
しろがねの音色もゆらに。

「わが絃の一には天の
飛車星のどよもし。

二の緒には青うなばらや、
海神の浪のゑわらひ。

「三の緒は、瑞樹のかくれ、
たわや女が夏の夜の夢、
四には、はた巖根の小百合、
あけぼのの香のささやきを。

『今宵しも思ひあがりつ、
 美し音は神もこそ聞け、
 常樂界のはた黄泉の
 魂むすび、——今暫の間を。』

琴の音は低にゆるびぬ、
 ああ今か、小野の草だに、
 奇し御靈葉にもゆらぎて、

静歌の音にはたつらぬ。

* 詩集『四の緒琴』に序す

* 藝のゆるされ

立樂の節はたゆみぬ聞きねいま
御蔭の庭に羽ばたきのはたと響みて、
セラヒムの聲こそわたれ、「天つ世の
生日足日や、事榮に酔ひさまたれぬ。

合奏の美し音色に聞きとれし
心あがりの、やがてまた見がほしとこそ
見ざらめや、御門柱の彩畫にも、
天つ顔ばせ、大御身の嚴のひかりを。

やをれ、今天路に虹を、野に花を、
眞闇に星を、黎明の空をあからめ、

わだつみの浪をいろどる選人を

召せよ。』とあれば、二の大門からりと鳴りつ。

しろがねの樞はきしり、諸とびら

つと離るるや階を繪師はあがりぬ。

*『太平洋畫會畫集』に序す



わだつみの浪をいろどる選人を

召せよ」とあれば、この大門からりと鳴りつ

しろがねの櫃はきしり、諸とびら

つと離るるや階を、繪師はあがりぬ

*『太平洋畫會畫集』に序す



鈴蘭の歌

—

「深山みやま密しきみの小枝こえだにも、

花はなはほのかにくゆる日ひを、

日雀ひぐら、日雀ひぐら女め、そなたには、

母御ははごが無ないか、子こが無ないか、

何故に色音の濕るや。』と、

さつさいよこの、

小木曾女。

二

『母も知らねば、子も有たぬ、

たつた一人の夫鳥を、

鷹にとられた日の初め、

歌の若えは忘られた、
嬪の鳥の身ぢやまで。』と、

さつさいよこの、

日雀女。

三

『雀がくれの狩場に、

黄脚鳴もや裏ぎりて、

さは囚はれの、——日の後は、
野木の古巢のおもひでに、
泣き濡れてのみ過すや。」と、

さつさいよこの、

小木曾女。

四

『夫に別れたまたの朝、

餘り戀しさを會たさに、

黄櫨の木立の山ごえを、

鷹師のもとに訪れて、

許されもこそ嘆いたに。』

さつさいよこの、

日雀女。

五

深山の鳥も、悲しびの

酒麩に醜むしたたりに、

酔はざるまい術なさか、

いづれは若い身の性の、

さても相似た宿世や。』と、

さつさ、いよこの、

小木曾女。

六

『鷹師の君の言やるには、

幸は市女にひさがれて、

肴にもこそなれ、其方には

代やまゐると、啄ばみに

やがて取せた草の實。』と、

さつさ、いよこの、

日雀女。

七

『深山姥の使ひ姫、

鸛が落した蠱の實の

粒のひとつや含まれて、

野木の叉枝の巢ごもりに、

芽ぐむや、禍の妖惑』と、

さつさいよこの、

小木曾女。

八

『狐にかくれて、切畑の

片日向にもおろしやれ、

木の葉ごろもの山姫の

袖をこぼれた實ぢやまで、

あり慰めにまゐらす。』と、

やつやつよこの、

日雀女。

九

『草くだものの償ひに、

秋のとまりの神無月、

末枯を小野に齎らする

『日』は鈍の葉もはぐくみて、

咲いたか、花の忘れぐさ。』

さつさいよこの、

小木曾女。

一〇

『山した小野は、羅漢松の

老木のもとに實を蒔いて、

花のしづくに濕すまに、

芽生は日に羽を伸して、

やをら生ひ出た、鈴蘭』と、

さつさいよこの、

日雀女。

一一

『あな憂と見たは、山姫の

心しらひの戯れか、

小木曾をとめの身柄には、

また見るものか、鈴蘭の

名は幸福のよみがへり。』

さつさいよこの、

小木曾女。

一二

『木の又枝に俯居して、

日にまた夜の齋戒に、
つと幻のほのめいて、
白よそほひの郎姫、
花は笑みそる、一の花。』
さつさいよこの、

日雀女。

『ああ、よみがへる歡喜の
日の前申し、鈴蘭の
ひとつびとつの花びらに、
黄金の文字も見やらぬか、
『あり待つ戀の齋戒』と、
さつさいよこの、

小木曾女。

一四

『待^{まち}よろこびや、またの日は、
 紅^{あか}顔を^らとめの^{あけぼの}曙^{あけぼの}が、
 山^{やま}した^そ小野^のの朝^{あさ}踐^{ぶみ}に、
 玉^{たま}裳^ものすその香^かにしみて、
 花^{はな}は咲^さきそる、二^にの花^{はな}。』と、
 さつさいよこの、

日^ひ雀^{がらめ}女^め。

一五

『また笑^{わら}みそめた垂^たり花^{はな}の
 麻^{あさ}の葉^は形^{がた}のくちびるに、
 天^{あめ}の醗^{した}酒^みを味^{あじ}嘗^なめて、
 聞^ききやらぬかの、囁^{ささや}きを、
 『齋^{いほ}はる戀^{こひ}の淨^{きよ}まり。』と、
 さつさいよこの、

小木曾女。

一六

汲むにまかせた大甕の
 深げの世かな、あり掬ふ
 辱なさにさしぐみて、
 あり木の枝の葉がくれに、
 今日もこそ待て、三の花。』

さつさ、いよこの、

日雀女。

一七

『ひたぶる心 汝が眼には、
 花は天路の熒惑星、
 明日は莖葉の三の座に、
 巖のひかりも見るわいな、

『浄まる戀のゆるされ』を。

さつさ、いよこの、

小木曾女。

『花を待ちみる事榮に、

さこそは齋へ、ともすれば

青水無月の小野の香に、

むかしの夢のうらびれて、

古巢を見てはさしぐむ。』と、

さつさ、いよこの、

日雀女。

三の百合

やをれ、此方様、初夏の
 永い日なかを何處へ往こ、
 ぬるむ小河の水こえて、
 向うお山へ花折りに。

花は何ぐさ、山の百合、
 瑞枝しだれた秦木皮の
 蔭にひとと手折りては、
 知らぬ『往時』にたてまつり。

深山頬白鳴きかへる
 十六夜薔薇の葉がくれに、

またもひと本見出しては、

『今日』を祝ひの花の環に。

一はかざしに、一は胸に、

さては御手に、『ゆくすゑ』の

あらまし事の願ひにと、

参らす花のあらばよい。

あかつき露のうは濕り、
まだ乾ぬ森のした路を、
眞保良の奥にわけいれば、
深山がくれの戸が見ゆる。

『夏野の姫に物まうす、

牧のをとめに、ひと莖の

花を。』と門をそたたけば、

からりと開いた闇の宮

宮の闕のかたかげに、

白よそほひの立すがた、

えならぬ香にも仄めいて、

咲いた、あえかの山の百合。

姫が御賜の花やとて、

心いそいそ寄るとすりや、

思ひもかけぬ尾鳴しの

蛇が見えそる、葉がくれに。

花は折りたし蝮の

葉守のまみは見憂いし、

浅野に百合は咲くまいに、

何を様にはまゐらさう。

ついと強往く手さきに、
蛇はぬる火のかつ消えて、
闇のあなたに、ほのぼのの
花や、——と見れば夢わいな、

山毛櫨の瑞枝の下蔭で、
様にもたれて眞白百合、

一はかざしに、二は胸に、
三は御手の手のひらに。

雛罌粟

花を、いよこの、植ゑやれ、
花を植ゑやれ、雛罌粟を。
罌粟の、いよこの、脆さに、
罌粟の脆さに、そのかみを。

小雀と桂女

—

別れた人に會ひたさに、
今日も野へ來た桂女は、
路の瑞樹の葉がくれに、
聞きこそすませ、美し音の

さつさ、いよこの、

小雀女、

二

『やをれ小雀女人の子は

思ひしをれて嘆く世を、

其方はひとり心安に、

咏め聲してさへづる。』と、

さつさ、いよこの、

桂女。

三

『あいな頼みの世に倦みて、

夜を泣き濡れた身ならでは、

鳥の咏める静歌の

小野の調べは淡かる。』と、

さつさいよこの、

小雀女。

四

『いく夜をひとり泣き濡れた、

小野の尼とは知るまいし、

日のしづけさを木がくれに、

むかし語りに耽りやれ。』

さつさいよこの、

桂女。

五

『曾ては、深き青山の

老木の枝の巢ごもりに、

つがひの雛を羽ぐくみて、

夫を待ちゐた日もそろ。』と、

やつや、さよこの、

小雀女。

六

『夫は巢立の子もつれて、

深山つぐみの來ぬひまを、

老の峠の切畑に、

黄金覆盆子や摘みやる。』と、

さつさ、いよこの、

桂女。

七

『ひと日樹の實を啄ばむと、

谿のまほらへ降りたまま、

山の嫗の蠱ものに、

夫は迷ひてかへらぬ。』と、

さつさいよこの、

小雀女。

八

『さては童男と魅されて、
隠れの宮に、しろがねの
手瓶や日毎たづさへて、
壘の眞名井も掬むやら。』と、

さつさいよこの、

桂女。

九

『明けたひと日を夫どひに、
野にまた山に鳴いて來りや、
巢は覆されて、驕だれの
鳴音はまたも聞かれぬ。』と、

さつさいよこの、

小雀女。

一〇

「さても憂事強つよみられの

重荷おもいに小附こづけ、葉はがくれに、

母ははの居ゐぬ間まを、蝮くちまの

窺うかが視みひ來きたすさびや。」と、

さつさいよこの、

かつら女。

一一

「ひとり居ゐ馴なれた木きをおりて、

み山やまの谿たにに落おちゆくに、

尾羽おは憂うれ身みをさへぎりて、

またあり悟もどく、わが世よに。」と、

さつさいよこの、

小雀女

一一

『天ゆくからに、
打たざなるまい羽搏とは、
さても相似た人の身の
もてなやましの心に。』と、

さつさいよこの、

かつら女

一三

『はては山へは歸るまい、
野こそは吾家、また墓と、
國原めぐる鶉立ち、
旅の八百日の寂しさ。』と、

さつさいよこの、

小雀女。

一四

『知らぬ遠方のさすらひは、
路さまたげも多かるに、
さても事無に世をし經て、
春を野木にも轉る。』と、

さつさいよこの、

かつら女。

一五

『ひと日木原に往き合うた、
小野の兄姫にとめられて、
あすは檜の小林に、
今も巢こそは營め。』と、

さつさいよこの、

小雀女。

一六

『さは許されの事榮に、

夢か『往時』は今もはた

牧の小笛にしをびては、

嘆きやるかの、さすがに。』と

さつさいよこの、

かつら女。

一七

『されば御空のたたずまひ、

野のあけくれを見知るほど、

心いられは調ひて、

昨日には似ぬ心地や。』と

さつさいよこの、

小雀女。

一八

『さては、揺えた當時の

魂のためたひ和ぎしづむ

眞澄の今のしづけさに、

見やるは何か、新に。』と、

さつさいよこの、

かつら女。

一九

『まだうら若いこの世には、

健か心いそしみて、

嘆きの鈍衣を脱ぎすべし、

あなたの空へ外寄るに。』と、

さつさいよこの、

小雀女。

二〇

鳥のさとしは然りながら、

なほ下心どこやらに、

うけひき難い心地して、

今は別れた野の路を。

さつさいよこの、

かつら女。

白羊宮畢

白羊宮正誤

四九	四六	四六	四五	三七	三五	三一	一五	一五	一四	一三	九	七	頁
七	七	一	三	八	四	三	七	二	六	五	五	五	行
装 <small>よそひ</small> ひ	若人 <small>わかひと</small>	君 <small>きみ</small>	塔 <small>た</small>	緒合 <small>おとぎあ</small> せに、	榎 <small>えの</small> 實	吹 <small>ふ</small> 咳	然 <small>しか</small> は、	青 <small>あお</small> に	日 <small>ひ</small> は、	世 <small>よ</small> に、	静 <small>しず</small> こころ	齋 <small>い</small> ひ <small>ぢ</small> に	誤
装 <small>よそひ</small> ひ	若人 <small>わかひと</small>	君 <small>きみ</small>	塔 <small>た</small>	緒合 <small>おとぎあ</small> せに	榎 <small>えの</small> 樹	吹 <small>ふ</small> 眩	然 <small>しか</small> は	青 <small>あお</small> く	日 <small>ひ</small> は	世 <small>よ</small> に	静 <small>しず</small> こころ	齋 <small>い</small> ひ <small>ぢ</small> に、	正

一九二	一六八	一六六	一四六	一四三	一二六	一一〇	八七	六七	六三	五九	五九	頁
四	三	四	二	二	二	三	五	一	二	四	三	行
い行くか、	天 <small>あま</small> なぬ	天 <small>あま</small>	影 <small>かげ</small> 青 <small>あお</small> に、	新 <small>あらた</small> 身 <small>み</small>	月 <small>つき</small> 眠 <small>ね</small> り	十六 <small>じゅうろく</small> 夜 <small>よ</small> 薔 <small>ばら</small> 薇	か <small>か</small> な <small>な</small> た <small>た</small> へ	妖 <small>あや</small> に <small>そ</small>	夕 <small>ゆふ</small> げ <small>え</small>	あ <small>あ</small> ら <small>ら</small> び <small>し</small>	冬 <small>ふゆ</small>	誤
い行くか	天 <small>あま</small> なる	天 <small>あま</small>	影 <small>かげ</small> 青 <small>あお</small> に。	新 <small>あらた</small> 身 <small>み</small>	片 <small>かた</small> 眠 <small>ね</small> り	十六 <small>じゅうろく</small> 夜 <small>よ</small> 薔 <small>ばら</small> 薇	「か <small>か</small> な <small>な</small> た <small>た</small> へ」	妖 <small>あや</small> こそ	夕 <small>ゆふ</small> げ <small>え</small>	あ <small>あ</small> ら <small>ら</small> び <small>し</small>	冬 <small>ふゆ</small>	正



明治三十九年五月一日印刷
明治三十九年五月七日發行



著者

薄田淳介

發行者

東京市京橋區五郎兵衛町廿二番地
金尾種次郎

印刷者

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
佐久間衛治

印刷所

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
株式會社 英舍

發兌元

東京市京橋區五郎兵衛町二十二番地
金尾文淵堂

白羊宮

金壹圓

文淵堂圖書發賣元



久留米市菊竹金文堂	大坂市東區南渡邊町杉木書店	東區佛光寺東入律書房	京都市烏丸通	星野文星堂	名古屋市宮町一丁目榮閣	前川文榮店	東京市京橋區中橋廣小路書店	東京市京橋區尾張町二丁目書店	北隆館書店	東京市日本橋區吳服町書店	上田屋書店	東京市神田區裏神保町書店	東京市神田區表神保町書店
-----------	---------------	------------	--------	-------	-------------	-------	---------------	----------------	-------	--------------	-------	--------------	--------------

明治三十九年四月改正

東京 金尾文淵堂書店

藏版圖書一覽

宗 教 書 類

					網島梁川 病 間 錄 <small>(三版) 金壹拾圓 小包料拾錢</small>	中村春雨 新 約 物 語 <small>(再版) 金壹圓 小包料拾錢</small>	同 舊 約 物 語 <small>(近刊) 金壹圓 小包料拾錢</small>	中村春雨 昇 畫 解 キリスト物語 <small>(新刊) 金拾二錢 郵稅二錢</small>
--	--	--	--	--	---	--	---	--

小 說 書 類

菊地幽芳 妙 な 男 <small>(全冊) 各金六十錢 郵稅八錢</small>	同 七 日 間 <small>(賣切)</small>	同 秘 中 の 秘 <small>(近刊)</small>	中村春雨 密 航 婦 <small>(新刊) 金七十八錢 郵稅八錢</small>	同 無 花 果 <small>(十版) 金七十八錢 郵稅八錢</small>	同 雛 鳩 <small>(賣切)</small>	同 犯 さ ぬ 罪 <small>(近刊)</small>	同 炬 火 <small>(新刊)</small>
---	-----------------------------------	-------------------------------------	---	--	---------------------------------	-------------------------------------	---------------------------------

小 說 書 類

木下尚江	同	同	須藤南翠	柳川春葉	大倉桃郎	佐野天聲	巖谷小波
火	良	新	間	緣	琵	露	喜
の	人	曙	一	の	の	の	劇
柱	の	光	髮	糸	歌	曲	七
(三版)	白	(近刊)	(新刊)	(新刊)	(四版)	(新刊)	草
金參拾五錢 郵稅六錢	(全冊)		金七十五錢 郵稅八錢	金六十錢 郵稅八錢	金六十錢 郵稅八錢	金六十錢 郵稅八錢	(近刊)
	各三十五錢 郵稅各六錢						金七十錢 郵稅八錢

雜 書 類

五十嵐力	山路愛山	子規自筆
兒童	社會主義管見	俳人芭蕉
の	見	蕉
研究		
(新刊)	(新刊)	(木版)
金壹圓 小包料拾錢	金三十錢 郵稅不要	金七十五錢 郵稅不要

詩 文 畫 集 類

薄田泣菫 白

羊

宮

(新刊)

金壹拾圓
小包料拾錢

同 暮

笛

集

(三版)

金六十錢
郵稅六錢

同 白

玉

姬

(新刊)

金八十錢
郵稅八錢

同 行

く

春

(品切)

與謝野鐵幹 む

ら さ

き

(品切)

與謝野鐵幹 毒

艸

(品切)

與謝野昌子 み

だ れ

髮

(品切)

同 小

扇

(四版)

金二十五錢
郵稅四錢

詩 文 畫 集 類

與謝野昌子
山川登雅
增田雅子

戀

ご ろ

も

(三版)

金四十錢
郵稅四錢

ミラ
野口米次郎

劍

と

戀

の

日本

(品切)

河井醉茗 塔

影

(新刊)

金四十五錢
郵稅六錢

鳥居君子 上總のやどり

(新刊)

金二十錢
郵稅四錢

卅八年度白馬會紀念畫集

(新刊)

金九十錢
郵稅不

小林萬吾 風景水彩畫帖

(新刊)

金五十錢
郵稅不

月 刊 書 類

島村抱月主幹

早稻田文學

每月一冊
郵稅一錢五分
每冊一錢五分

尾上新兵衛主幹
鏑木清方主幹

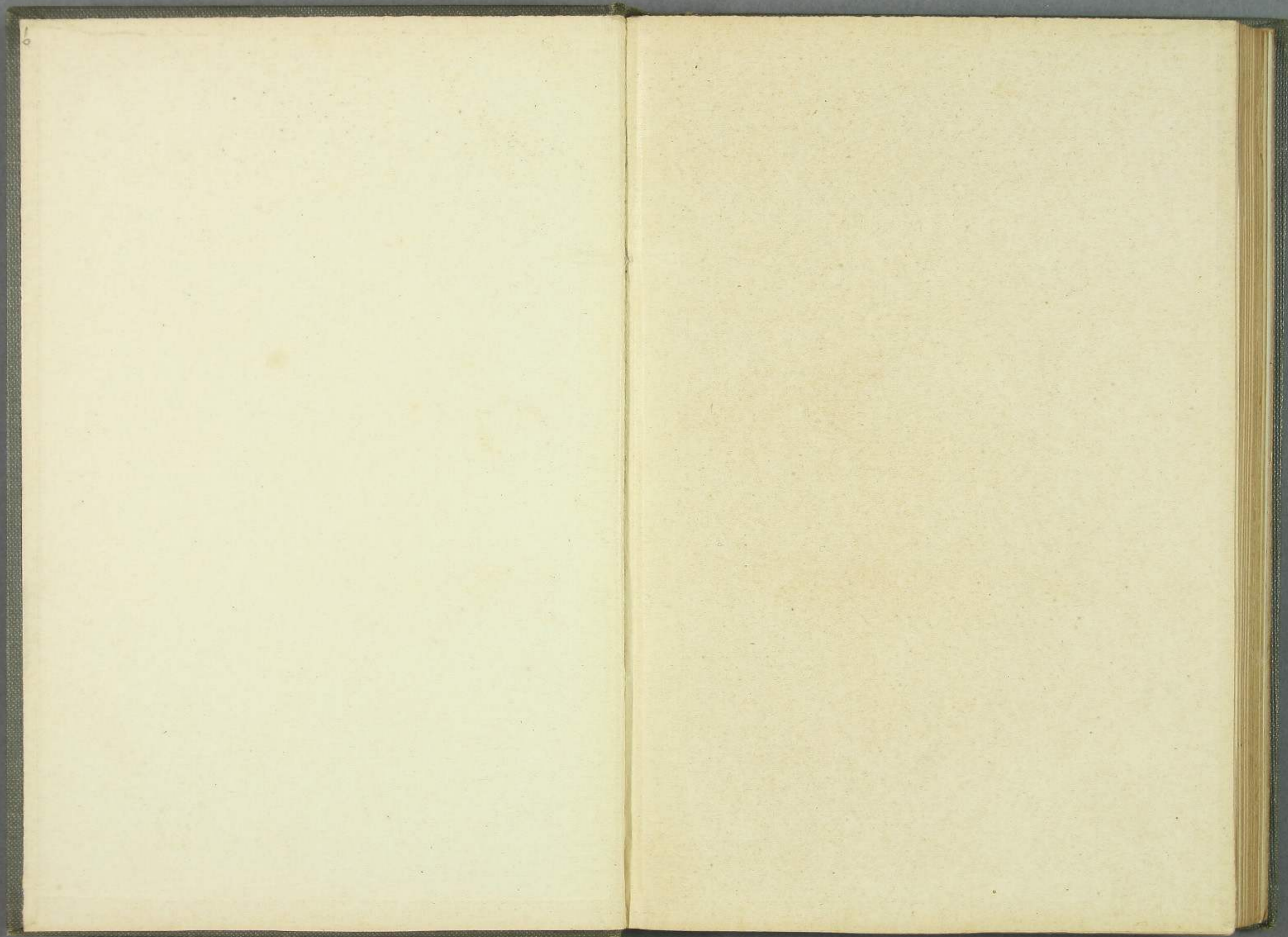
お伽世界

每月一冊
郵稅一錢五分
每冊一錢五分

丸山晚霞主幹

水彩畫講義錄

每月一回
會費一ヶ月六十錢
郵稅五分



10